

に妥当である。なお延喜式以前の弘仁式、貞觀式及び倭
因料は示されてはいないが、項目を立てて計上されるほど
倭因料箱の額が大きくなかつたからであるといわかれて
いる。

蝦夷の倭囚が九州に移配されたのは、神龜二年(七五五)
閏一月、筑紫に五七八人。宝龜七年(七七六)九月、大宰府
管内諸國に三九五八。同年十一月大宰府管内各郡に讚岐
へ三五六八(出羽の倭囚)など記録されている。このう
ちの數十人が、海部郡德門郷の佐伯部に移配されたとい
てよい。この推測に今少しフイフイジョンをつければ、豊
後國司であった佐伯宿祢久良麻呂は、宝龜二年(七七一)
任を終えて帰京、従五位上民部少輔に補せられていたが、
宝龜七年五月、出羽の蝦夷が叛くと、陸奥鎮守権副將軍
に任じられて、その鎮定に赴いている。この反乱は翌八
年まで続いたが、久良麻呂はその間に一度帰京している
から、倭囚をひきいて帰京したのではなからうか。佐伯
宿祢久良麻呂と佐伯部、その関連を考えると、佐伯の地
名起因も史譚のタネになりそうである。

次の話題は、佐伯、是本と佐伯院および海部公氏の關係
だがこれはまだ研究中、いささか大胆な發想だが、佐伯
是本と大神惟基は同一人格ではなく、別系統の人物で、
たまたま時代を同じくしたため、映像が重なつたもので
はないかと考え、いま天慶の亂關係の史料をあさつてい
る。

(筆者住所—福岡市東區城浜団地八〇二依殿ま院内)
(813)

「佐伯史談」編集室よりお願い、マツチを寄贈を
皆さんから寄せられた原稿を願紙に書き、この作業は必要、訂正用
のロソクとマツチ、ロソクは少しで長く使えるが、マツチはたくさんい
ります。台所用のマツチは火力が強くて困る。広告マツチ、サービス
マツチが最適です。いまだにありましたら五個でも三個でも——。

圖書紹介

『邪馬台國と豊王國』安藤輝因 著

—佐伯人の書いた日本の古代史—

著者安藤長良、佐伯氏大入馬(本籍)出身、父長良の職
業關係で東京で育ち、明大東門部卒。

終戦後帰郷、佐伯市で「豊日新聞」を主宰。

昭和三十九年大阪読売新聞に入社、現在は退職し、北九
州市小倉に居住されている。(佐伯)

西暦紀元前二、三百年の頃、九州北部に強力な古代原始
國家が実在した。私は、それを「豊王國」と呼ぶ。

七世紀の大化改新(六四五)によって、豊前・豊後の
二國に分けられる前の「豊國」が、その豊王國の後の姿
である。四世紀末から五世紀にかけて、畿内大和に古代統
一國家、すなわち大和王朝が成立するまでの五六百年間
倭人(古代日本人の呼称)の國の中の最強國として、九州島
に君臨していた。

しかしこの豊王國は、いつの間にか歴史の本流からは
ずされ、史実さえも失われてしまった。それは九州分鏡
内分で、その所在が争われている「邪馬台國」同様、古
代史の大きな謎である。——以上圖書書き出しの部分——

著者は歴史学者ではない。新聞人である。数年前発売
新聞の大分版に「消えた女王國」と題し、十六回にわた
って書かれたそうだが、私はそのことを知らなかつた。
それに新しい史料を加えて考察し、埋没していた「豊王
國」の発掘を試みた、まことにユニークな著書である。
この本と著者から贈られた佐伯氏が、私のところへ送
つてよこしたものの、一読して日本の古代史の眼を開いて
はしく、あえて紹介する次第である。(羽柴)